

ランペドゥーザ島（イタリア）の移民・難民問題

2013年7月8日、フランシスコ教皇がランペドゥーザ島でのミサで、毎日のように島に何百人が漂着、またはたどり着く前に溺死する移民・難民に目を向けるよう訴えました。それをイタリアの報道を見た時に、これでようやくランペドゥーザの名前が、島と海で何が起きているかが、少しは世界に知れ渡ることに喜びました。

近年、日本人を含め、世界中の人達の間では、ランペドゥーザ島は透き通った青い海の観光地として知られていますが、20年以上前から今日もなお、命がけでヨーロッパに渡る人達の生死を分ける入り口であり、島民とイタリアはずっとその命と向き合っていることは余り知られていません（愚かなことに、サルビーニ氏が救助船すら上陸させない措置を取り続けていますが）。私も1999年から現地の報道、ドキュメンタリー番組、そしてイタリア人の友人・知人を通して問題を見てきました。

この問題を知らない人は、イギリス、ドイツとフランスがアフリカからの移民・難民を最も受け入れているという印象を持っているでしょう。では、その人達はどのようにしてその三国、ほかのヨーロッパ諸国に渡るのでしょうか。その大半がランペドゥーザ島に漂着し、シチリア島やイタリア各地を経由しているのです！イタリアが受け入れなければどこにも行けないのです。悲しいことに、今は救助船の入港がなかなか許可されず、スペインに回されています。では、日本の国土ときほど変わらないイタリアにどれだけの人達が上陸してきたのでしょうか。

2016年6月	48,987人
2017年6月	61,201人
2018年	13,768人

（ミラノのカプチン修道会のボランティア団体 Opera San Francesco のサイトより）

イタリア政府は難民に認定しなくても、命が助かった多くの人、無数の人を黙って受け入れてきました。教会と連携したNGOやボランティア団体の支援も欠かせません。これだけでは「響き」が良い表現で、誤解を与えるので、負の面も書きます。以前はしっかりとした収容施設がありましたが、毎日のように数百人が漂着するため、対応できなくなり、簡素で劣悪なキャンプ施設が広がっています。収容施設で数か月過ごした後にホームレス生活になったり、あろうことか、ランペドゥーザ島沖で生き延びた155人を当局が違法移民の容疑で訴追したことも事実（2013年10月）。当局の非人道的な対応や劣悪な環境に対する難民の怒りが爆発したり、困窮した生活から犯罪に手を出す人もいるため、被害を受けている地域では多くの人々が締め出す政策を支持するのも事実です。

政府の受け入れ施設への支出は1億8千万ユーロ。2012年には1万5,715人が難民申請し、約57%が認められた（欧州全体の27%を超える）。詳細は以下の記事を参照：

<https://jp.wsj.com/articles/SB10001424052702303836304579126800992846862>

イタリアは他のEU諸国より経済的に貧しく、安定した仕事はほとんどありません。それでもどういう形であれ、生き延びられるならイタリアにいて良い、という暗黙の了解で住まわせていました。2018年、サルビーニ氏の強硬政策で転換期を迎えました。クリントンとオバマ政権時にアメリカに定住していた中南米からの不法入国者が、トランプ大統領の強硬策で締め出されているのと同じです。

シチリア島を訪れた際に、路上販売をしているアフリカ人を何人も見ました（一人は私と同じ高速バスで隣県まで販売目的で移動）。地元の友人達（一人は支援団体のスタッフ）に難民問題について考えを聞いてみました。

「多くの人が安住の地を求めて他国に移るが、直面することは変わらない。まともな入居施設や手厚い保護があるとはいえ、その人数枠に入れなければ、ここと同じ目に遭う。一か八かの賭けだ。しかし、報道されるのは完全に保護された人達のことばかり。それが世界に伝わり、移民・難民に寛容な国と思われる」

イタリアに上陸した難民の大半がイギリス、フランス、ドイツやベルギーに移ります。それらの国が受け入れ人数、難民に認定した数を正式に公表します。当然のこと、その数はイタリアより遥かに上回っています。長年前、日本の民放ニュース番組もその数字を何回も出し、コメンテーターもイギリス、フランスとドイツが最も寛容と発言。イタリア、ランペドゥーザ島の問題には一切言及なし。ようやく話題になったのは、シリア難民が欧州に押し寄せた2015年（NHKのBS放送は2011年にランペドゥーザ島の問題を特集）。

シリア難民が途切れ目なく流入した多くの国がパニックに陥りました。ヨーロッパ寛容と称されるドイツさえです。コソボ難民、アフガン難民を受け入れた時以来のことでしょう。路上生活者を含め、日頃から異なる人種を見慣れているとはいえ、命がけで入国する人、それも大群の波を見たことがなかったので無理もありません。それまで日常目にしてきた外国人が、元々は難民だったこと、中には命からがらイタリアに漂白した人がいたとも知らず、初めて難民とは何かを実感したのではないのでしょうか。

一方、ランペドゥーザ島の島民は十数年前から毎日のように数百人の生死と向き合い、南部地方は1991年と1997年に何万人ものアルバニア難民を受け入れたことから、イタリア各地では「難民を船でこちらに回せ。自分達が引き受ける」という声が大きく上がりました。もちろん反対者もいました。

2015年以前に、移民・難民を受け入れた国の政治家、官僚、国民の間で「イタリアが上陸させずに強制送還すれば問題は起きないのに」という声が何度も出ました。イタリアの受け入れ姿勢に対し「上陸させるな」という他国からの声。受け入れが限界にあるイタリアの状況を見て「劣悪な収容環境」と非難。いざ、自国に押し寄せると「来るな」と門戸を閉ざす。フランシスコ教皇のミサでの言葉が、まさにこのことを指しています。

「わずかばかりの平穏と平和を求めて。より良い場所を探し求めましたが、見出したのは死でした。どれほど繰り返されることでしょうか、それを探し求める人たちが、理解も、受け入れも、連帯も見出すことができないということが！・・・(亡くなった人たちの)その血の責任は誰にあるのでしょうか？」

イタリアが長年に渡り移民・難民を受け入れたのはなぜでしょうか。国内外からの批判に対する信念はこうです。

「今のイタリアがあるのは、数百年に渡り自分達の祖先を受け入れた国々のおかげ。安住の地、安定した仕事を求めて外国に渡り、その家族がそれぞれの国またはイタリアで暮らしている。今日は、助けを必要とする人たちに自分達が手を差し伸べる時代である」

イタリア政府も国民も自分たちの人道的支援を、どれだけの人を受け入れ、どれだけの人が上陸できずに亡くなってきたかを世界に大々的に訴えることはありませんでした。

「命を助けるという当然のことをしているだけ」という考えです。シチリアの友人を含め、とりわけ南部の人に共通する考えがあります。

「自分達の土地は何世紀に渡り他国に支配されてきた。その間にアラブ人、アルバニア人、クロアチア人が渡ってきた時代もあり、その子孫が今もいる。他民族との共存は昔も今も変わらない」。

それでも皆が同じ価値観を持っているわけではなく、受け入れを巡り、街中での衝突も日常茶飯事になりました。強硬派のサルビーニ氏の支持者が多いとはいえ、受け入れ賛成派の方がまだ優勢のようです。非人道的な行為に対して大勢で抗議デモをしたり、ランペドゥーザ島とシチリア島に接近する船を援助したりと、難民に関心のある人々が多いのが救いです。